優秀賞論文要旨

少女マンガに見る恋愛の形とその時代背景

～一条ゆかり作品を対象としての分析～

横　田　純　子

本研究では、一条ゆかり作品のデビュー当時から現在に至るまでの移り変わってきた恋愛の形に焦点をあて、どのような社会背景の中でそれらが描かれてきたのかを、作風によって、外国少女の明るいラブコメディの時期、伝統的性役割観が強く表れている時期、女性が恋愛で主導権を握り始めた時期、恋愛の中で性行為が定着した時期の４つの時期に区切って考察した。

外国少女の明るいラブコメディの時期は、一条がデビューした1968年から１～２年の間である。この時期の特徴は、外国を舞台にしたコメディであるために全く現実感がないことと、女性が年上である場合の恋愛が描かれていないことである。この背景には次のことが考えられる。60年代後半まで少女マンガで恋愛をテーマにした作品はあまり描かれなかったが、一条がデビューした頃ようやく描かれるようになった。この頃女性の大学進出が進み、恋愛結婚が増加したことが、少女マンガで恋愛を描く土壌を築いたと考えられる。つまり、一条がデビューしたこの時期は、日本の恋愛少女マンガの模索期であったために、現実感がなくパターン化したものになっているといえる。舞台が外国に集中しているのは、当時の日本人の多くがアメリカンライフや外国映画に強い憧れを抱いていたことに加え、一条自身の西欧コンプレックスが影響していると考えられる。また、この頃に女性が年上の場合の恋愛が描かれなかったのは、女性の進学率が上昇し恋愛結婚も珍しくなくなってきたが、まだまだ社会一般では、恋人同士や夫婦は男性が年上という考え方が根強かったからだと考えら

れる。

1970年～1980年代前半の作品における恋愛の特徴は、「女性は従順で家庭的」といった伝統的な性役割観をベースに描かれていることである。この頃は、家庭的な女性を強くアピールしたコマーシャルが数多く作られていたことからも分かるように、社会的にそのような意識が根強く残っており、女性たちも専業主婦を今よりずっと強く支持していた。また、かつてないほどのアイドルブームでかわいらしく従順そうな女性が大人気だった。当時のこのような社会意識や流行などを、一条が敏感に捉え作品に反映したと考えられる。

1980年代後半の作品では、恋愛に積極的で逞しい女の子が増え、恋愛の主導権を女性が握るようになってきたことを特徴としてあげることができる。当時、85年の女性差別撤廃条約批准や86年の男女雇用機会均等法の施行、80年代にフェミニズムの思想を徹底的に商品化して一般大衆に受け入れさせることに成功した上野千鶴子などにより、フェミニズムが社会的に広まった。そして、女性が今までより活発で積極的に、かつ逞しくなったことが背景として考えられる。

90年代以降の恋愛の中で性行為が定着した時期の特徴は、以前は極力描かれることのなかったセックスが、恋人とのコミュニケーションの一つとして特別視されずに描かれるようになったことである。この背景には、女性雑誌でセックスの特集が定着し、高校生にまでセックスが一般化するなど社会的に性意識が大きく変化したことが理由として考えられる。

以上のように、デビュー当時から現在に至るまでの一条作品で描かれた恋愛の形を、作風によって時期ごとに区切り社会背景を考察してきた結果、その時代、時代の作品はそれぞれの社会意識や流行を敏感に映し出していることが分かった。その一条ゆかり作品が、デビュー当時から現在に至るまで支持され続けていることから、読者はマンガの中の恋愛に常に現実感を求めていると考えることができる。